

# 茶の湯 文化学会 会報

第115号 / 2022年12月23日

発行 茶の湯文化学会

京都市左京区下鴨森本町15

生産開発科学研究所内

〒606-0805

TEL 075-702-9270

FAX 075-702-9314

E-mail:chanoyu@oregano.ocn.ne.jp

https://www.chanoyu-bunka-gakkai.jp/

No.115

## 堺・千利休屋敷跡遺構の変遷について

木村栄美

堺にある千利休屋敷跡は、いづろから「利休屋敷跡」と言われるようになったのかは明らかではない。当地については、代々太郎兵衛を名乗る加賀田家（屋号は山家屋）が所有していたとする。「元禄二己巳歳堺大絵図」には、利休屋敷跡とされる今市町あたり（現在の宿院西一丁及び二丁）には、山家屋太郎兵衛の掛屋敷が見られる。加賀田家の菩提寺である堺・念勝寺（真宗大谷派）には、もとは「太子屋」での中に「山家屋」を称した、とする由来が残されている。太子屋及び加賀田家との関係性について今のところ詳細は明らかではないが、先の「元禄二己巳歳堺大絵図」には、宿院大浜筋を挟んで東側に太子屋源兵衛の掛

屋敷が記されている。千利休が活躍した時代、太子屋を屋号とするのは牧谿が描いた「大根ノ絵」（宮内庁三の丸尚蔵）等を所持していた太子屋宗喜あるいは宗有（字）、宗高がいる。『天王寺屋会記』にも、宗喜が開いた茶会の記録が残されており、堺を代表する豪商の一人であったといえよう。

明治一六年（一八八三）刊行の「住吉・堺名所并二豪商案内記」には、加賀田太郎吉の名で店構えが掲載されており、「山家や」という屋号で、銘酒「大和川」「龍」を醸造していた。堺出身の歌人・与謝野晶子は、幼少期を過ごした堺で、一緒に遊んだ美しい友達との回想を「山太郎のおみきさん」として綴っている。この山太郎が堺でもっとも古い加賀田家で、少なくとも明治三〇年に入るまでは、当地を所有していたことに間違いはなからう。

天保十一年（一八四〇）の利休二五〇年遠忌以降、茶の湯の世界において利休帰が顕著になった。堺においても、弘化二年（一八四五）加賀田家がこの地に、利休好みと伝えられていた実相庵（当初真言宗・鹽穴寺にあり、のち南宗寺に移築、昭和二〇年（一九四五）七月の空襲で全焼し、戦後再度南宗寺に再建された）の写しの二畳台目の茶室を建立し、大徳寺第四三五世で、堺・禅通寺の第一五世でもあった大綱宗彦を招き、茶室披きを行った。大綱は千家との関りも深く、利休二五〇年

遠忌においては、表千家・吸江斎、裏千家・玄々斎、武者小路千家・以心斎の三千家とともに、京都で大々的な法要を行っている。大綱は、加賀田家の茶室に「懐旧」と命名し、その墨蹟を残している。「懐旧」とは、利休のふるさとにおいて利休の精神に還る、という意が込められているのである。大綱の墨蹟「懐旧」には「伝領利休宗易居士最初居住之地」と記されており、当地が当時利休屋敷跡として認識されていたことを窺わせている。大綱の墨蹟「懐旧」は、後に足袋の製造販売を行っていた福助の辻本家が所蔵することとなる（挿図1）。



挿図1 辻本邸の懐旧扁額（昭和初期）（今日庵文庫蔵）

も所有することとなったと推測される。福松の婿養子で、福助足袋株式会社設立者の辻本豊三郎は新たに屋敷を建て、大塩平八郎の私塾「洗心洞」にちなんで、「洗心洞」と命名した。当初は住居として使用していたが、後別邸とし茶会等が催され、あるいは書斎として用いられた。また豊三郎は晩年、病氣療養で用いていた。「懐旧」に相当すると推測する茶室には、「洗

心」という扁額が掲げられている写真が残されている（挿図2）。

利休屋敷跡にあった本邸及び茶室は戦災の被害を受けたものと推測されるが、その被害規模は明らかではない。昭和四〇年代に豊三郎の後を継いだ長男・英一が、自身の隠居所として、京都の別荘地・修学院へ、かつての「洗心洞」及び「懐旧」を再現すべく、新たに邸宅を建立した。しかし、英一はその完成を見ることなく、この世を去っている。建物及び土地はその後、京都市が所有するところとなり、京都精華大学のゲストハウスとなった。修学院における建物については茶室を中心に、平成一六年（二〇〇四）頃京都伝統建築技術協会、堺ボランティア協会及び堺市博物館が調査を行ったが、その後十六年近く全くの手つかず



挿図2 洗心の扁額がかかる茶室（今日庵文庫蔵）

となっていた。令和二年（二〇二〇）四月より、京都芸術大学が建物及び庭園の保存・修復のために、歴史遺産学科の学生を中心に調査を進めている。

堺・利休屋敷跡における残された課題としては、利休屋敷跡と、いつから称されるようになったのかを明らかにする必要がある。また加賀田家、辻本家が所有した中で、敷地がどの規模であったのか不明な点が多い。茶室「懐旧」についても、加賀田家の残したものと推測するが、洗心洞という名称が、辻本邸全体を指すのか、あるいは



挿図3 茶室「懐旧」現在の姿

辻本家として茶室に「洗心」と命名していたのか、そのあたりをもう少し調査する必要がある(挿図3)。

【参考文献】

- ・北尾春道編『数寄屋聚成』四(洪洋社、一九三六)
- ・重森三玲『日本庭園史図鑑』第一七卷(有光社、一九三七)

理事会

令和四年度第一回理事会が、九月四日(日)午後二時よりZoomミーティングで行われた。理事十四名が出席し、以下の議題について討議がなされた。

一、各担当理事より事業報告

- ・福助足袋『福助足袋の六十年 近世足袋文化史』(福助足袋、一九四二)
- ・「元禄二己巳歳堺大絵図」(前田書店、一九七七)
- ・与謝野晶子「私の見た少女」(大正四年雑誌「新少女」)に掲載。後『私の生い立ち』(刊行社、一九八五)に併せて所収。挿絵は竹久夢二)
- ・平川善弘「旧辻本邸付属茶室「懐旧」の調査を終えて」(『普請』三四、京都伝統建築協会、一九九四)

- 二、令和四年度大会の報告
  - 三、令和五年度総会・大会について
  - 四、役員選出
  - 五、会誌・会報について
  - 六、その他
- 第一議題では、令和四年度の各地例会について、出席の担当理事よりそれぞれ報告が行われた。
- 第二議題では、令和四年度総会・大会の報告が、山田副会長より行われた。総会・大会の参加者は一、二六名。見学会の参加者は五十九名であった。
- 第三議題では、令和五年度総会・大会について話し合われた。来年令和五年度は当学会創立(平成五年(一九九三)十月十六日)三十周年を迎える。前例ではその十月を過ぎた後の令和六年開催予定の大会が三十周年記念大会となる。なお、令和五年度については六月開催予定の大会も(プレ)三十周年記念大会とし、周年記念行事を行うことを可能とする。令和五年十月に特に学会主催行事は設けない。
- 会場は順番から東京となる。シンポジウムを設定した場合、テーマとして従来東京会場で行われてきた「江戸・東京の茶の湯」シリーズの続きとして、「東京の近代の茶の湯」案が出された。これならば見学会場の選定にも不自由しない。また、現在刊行中の『茶書古典集成』で取り上げられた茶書が、『茶道古典全集』刊行後発見された新出茶書や、同全集で質の劣る底本を使用していたものが、原本あるいはそれに近い写本を採り上げていることを考慮すると、このような研究状況を会員に知ってもらいたい、また会員諸氏の研究に役立ててもらうため、各茶書を採り上げた大会報告、及びシンポジウムを行ってはどうか、という案が出された。
- さらにハイブリッド方式での開催とか、見学会・懇親会の実施など、東京圏在住の理事との意見の

摺り合わせもあり、問題山積なので、矢野会長中心に諸問題を検討し、次の理事会、ないしは拡大理事会には大会案を提出するという事になった。

第四議題では、役員選出がなされた。副会長は三名までとされているので、理事会後速やかに一、二名の候補者に会長から連絡を取り、内諾が取れたら候補者として理事会に推薦する方針。監査は筒井紘一参与・監査が退任されることとなった。次の監査には、影山純夫前理事（会員）の内諾を得、来年度の総会で推薦することとなった。新任理事・幹事が推薦され、理事会で承認された。矢野新会長のもと、学会の一層の充実を図るため、幹事の役割分担を再編成し、大会・例会・会誌編集・会報編集などに参加していただくことになった。会誌編集委員は神谷昇司理事が退任され、福島修理事が新たに参加されることになった。会報は、飯島照仁・中村幸・

船阪富美子の各理事の下、幹事からも作成に参加していただくことになった。例会についての理事・幹事の異動はなし。なお、岩崎理事は伊勢在住のため、近畿例会から東海例会に所属が異動することとなった。

第五議題では、会誌について、山田編集委員長より、会誌三十八号の進捗状況が報告された。また、会誌の「会誌投稿規定」の変更の件の提案があり、現行「三、体裁 原稿は縦書きとし」とある箇所を、「三、体裁 原稿は縦書きを原則とし、必要に応じて横書きも認める」に、「四、提出 電子メディアで原稿を提出する場合 は、プリントアウト紙を二通添付する」とある箇所を、「四、提出（上記の部分削除）」と、することが承認された。但し「四、提出」の部分に関しては、削除によって生起する問題があり、これについては次回の理事会、ないしは拡大理事会までに会長などで対応案を作

成し、提出することになった。

会報について飯島編集委員長より、会報一四号の進捗状況が報告された。また、矢野会長より学会創立三十周年を記念して、歴代の副会長に関連原稿の執筆を依頼し（千字程度）、来年度、都合により再来年度の会報に順次掲載する提案がなされ、承認された。

対象となる副会長経験者は、村井康彦・戸田勝久・小泊重洋・高橋忠彦・筒井紘一・影山純夫・神谷昇司・谷端昭夫・竹内順一・田中秀隆・中村修也の十一氏。

学会会員・維持会員の減少により予算が縮小している現状を鑑み、経費削減の必要が生じており、会誌・会報を手始めとして、製作費を会長が検討した。そして他の印刷会社からの見積もりを取り、理事会に提示し、協議した結果、会誌は思文閣出版から福井市の創文堂に変更することになった。会報は製作価格により従来通りのティ・プラスに。また会誌のデザ

イン等の権利関係も不明確な部分を明確化する方向で、ナンバードン・デザイン・オフィス（佐村憲一）と協議することが了承された。

第六議題では、広報活動について、フェイスブックの活用を近畿例会は中村幸理事に、東京例会は依田徹理事に依頼することが確認され、依田理事には学会の「チラシ」の再作成を依頼することも承認された。

登録無形文化財については、当会の提唱する「茶の湯」という用語と内容に対して、文化庁は従来から「茶道」という用語を用いており、当会としては文化庁と様々な協議が必要であると、会長から報告があった。

本年度大会のシンポジウムのパネラーの一人、日独文化研究所長の大橋良介先生より、同研究所のウクライナ共和国支援の「クラウドファンディングのお知らせ」を当会ホームページに掲載して欲しいとの依頼があり、協議の結果、

掲載を了承した。なお掲載期間は限定されるとのこと。

会員増強について、若い理事・幹事に方策提出などを依頼してはどうかとの提案が岩崎理事からあり、同理事にリーダーシップを取ってもらうことが承認された。

## 例会

### 東京例会

(令和四年四月二十三日)

「文献にみる光悦茶碗とその受容の様相―近世を俯瞰する―」  
讚井瑞祥

本阿弥光悦(一五五八―一六三七)は、刀劍鑑定を家職とする家に生まれたが、本業の傍ら職人との協働を通じて美術工芸品の制作にも携わり、陶芸では楽焼茶碗を自作した。発表者は現在、それら光悦茶碗を対象とする通史的な受容史研究に着手しており、本発表

ではその一環として、近世を前期・中期・後期に分け、受容主体の動向に焦点を当てつつ、各期における価値形成の過程を検証した。

近世前期について、光悦茶碗の文献上の初見は、表千家四代江岑宗左の茶会記に見出され、作品の初期受容が千家流の範疇で始まっていたことが判明する。これは生前の光悦が千宗旦やその周辺の茶人たちと茶の湯を介して接触していたことに端を発していたものと想定し得る。

近世中期には、都市圏の町人層における千家流の支持拡大に連動して、光悦茶碗の価値も各地域へと伝播してゆく。とりわけ、新興の豪商茶人を主体として、光悦茶碗の積極的な収集・使用が推し進められるが、いくつかの作品は表千家六代寛々斎などの権威者により鑑定・命銘がなされたことで、名物としての評価を確立した。

近世後期には、表千家七代如心斎が制定した七事式の流行や、千

家直属の中間教授者たちによる普及活動を通じ、千家流は武家階級にも支持基盤を開拓した。さらに、大名・豪商間の関係深化を契機として、茶の湯を介した相互交流が増幅するなかで、光悦茶碗の価値も豪商茶人から一部の大名茶人へと伝達されてゆく。

「天」に捧げる茶―「称名寺聖教」を手掛かりに―

### 張名揚

鎌倉時代後期の書写とされる称名寺所蔵「順忍書状」紙背(「金沢文庫文書」994)「題末詳聖教」には、大黒天関連と推される祭祀に茶を酒の代用品としてよいと記されている。さらに同資料には星供の時に茶を用いるとあることから、茶の酒の代用品としての利用は、「天」に位置づけられる星宿信仰の延長線上にあると考えられる。栄西(一一四一―一二二五)が記した『喫茶養生記』の「天等」を供養する時に茶を用いると

いう記述も、「題末詳聖教」同様、密教儀礼を踏まえて記したと考えられる。

また、星宿に茶を献上する密教儀礼は、中国道教由来とされている。隋唐期道教の醮(シヨウ)という儀礼に注目してみると、『隋書』「経籍志」や法琳(五七二―六四〇)『弁正論』には星宿との関わりが見出せる。また道世(？―六八三)『法苑珠林』には「旧時」の「祭醮」には「鹿脯」「清酒」を利用し、「今」は「干棗」「香水」を供物とする。とある。「干棗」は複数の称名寺所蔵資料に星供の供物とされており、「香水」は茶を指すとみられ、「香水」と「干棗」の利用は密教星供と一致している。さらに一行(六八三―七二七)『七曜星辰別行法』において星宿に捧げる供物は、醮に用いられる「脯」と「酒」でもあるため、『法苑珠林』の供物が密教系資料と共通していることがわかる。「干棗」と茶の多用される中世日本の密教

星供は、星宿の信仰と深く関わる隋唐期道教の醮の影響が見出しうるのである。

(令和四年七月二日)

「益田克徳の茶とその周辺」  
その三 高橋箒庵の一番町邸  
茶室「寸松庵」の移築と「茶室開き」

神保乃倫子 八木京子

益田克徳は、高橋箒庵が茶人として評判になった一番町邸茶室「寸松庵」の移築に関わっている。私共は、箒庵の新宅完成、茶室移築、「茶室開き」の日時、一番町邸と茶室の間取り図等を明らかにし、克徳の茶の姿がどの様に見て取れるかを考察した。

箒庵は明治三二年春に「茶室開き」をしたと記述しているが、同年五月の『読売新聞』に箒庵の転居広告が掲載されており、従って一番町邸の完成は、ほぼこの時期であったと推定される。次に由利公正の伝記に、同年七月に「茶室

割愛」の記述がみられ、従って明治三二年春の「茶室開き」は時期的に矛盾する。

また明治三六年五月号の『太陽』に、石黒況翁が箒庵に招かれた茶会記「寸松庵茶会の記・明治三六年三月二三日」が詳しく掲載されている。同茶会記には、箒庵が「茶室開き」に使ったと『我楽多籠』に記述した道具「寸松庵色紙」、「佐久間将監像」、「将監作茶杓」が記されており、明治三六年三月二三日の茶会が「茶室開き」であったと推察される。この「寸松庵茶会の記」の道具組には茶の湯上級者の豊富な知識・経験・発想が見て取れ、ここに克徳の関与が考えられる。

次に箒庵は「茶室は大徳寺の寸松庵にあったもの」と記述しているが、一番町邸茶室は「三畳台目」で、『槐記』に記載された「囲いの四畳」とは異なる。また大徳寺「寸松庵」は天保五年に待合「潤遠亭」を除いて建物は焼失したと

の記録があり、従って「寸松庵」茶室の移築は有り得ず、克徳が「利休の深三畳台目」写しを作ったと考えられる。

また一番町邸の庭は「滝や溪流があり鬱蒼とした山の中の雰囲気である。」と「名園五十種」にあり、克徳の築庭のテーマである「塩原・小太郎ヶ淵」が表現されていた。

この様に、明治三十年代の克徳円熟期の茶の姿は箒庵の一番町邸茶室と「茶室開き」とその道具組などに見る事が出来るのである。

「小浜藩主酒井忠義の茶道具蒐集」  
依田 徹

大正十二年（一九二三）の「若洲酒井伯爵家御所藏品入札」は、多数の優れた茶器が出されたことで知られる。しかしこれまで、小浜藩酒井家のコレクション形成過程については、まとまった研究はなかった。発表者は高橋義雄『大正名器鑑』に譲渡証などが翻刻さ

れていることに注目し、そこから小浜酒井家の蒐集経緯がある程度追うことが出来ることに気付いた。これらを通覧すると、幕末期

の藩主である酒井忠義が、一代で驚くべき蒐集を行っていたことが浮かび上がってきた。さらに売立の時に道具商に残されたと見られる証書類が道具商「関庄」に伝わっていた他、小浜市立図書館の「酒井家文書」にも一部証書類が保存されていることが確認できた。これらの進出情報を加え、本発表では酒井忠義の茶道具蒐集について明らかとすることを試みた。

酒井忠義は京都所司代を重要なキャリアとする幕閣であり、その地位を用いて特筆すべき蒐集を行ったコレクターであったと位置づけられる。それは政治的に深く結びついた井伊直弼が、『茶湯一会集』によって精神的に茶道論をまとめあげながらも、物質的な蒐集に力をいれなかった態度と対照的である。また忠義の蒐集は、

唐画や「国司茄子」「北野肩衝」「虹天目」「夕陽天目」といった、利休以前の大名物の蒐集に力を入れた点に特色がある。利休・遠州への関心を中心とする松平不昧の蒐集とも質的に相違を見せ、幕末期にこの様な価値観をもったコレクターが居たという点で特筆すべきだろう。

### 近畿例会

(令和四年八月二十七日)

「英一蝶筆「仏涅槃図」(ボストン美術館蔵)」にみる冬木屋上田家の周縁」  
宮武慶之

英一蝶による「仏涅槃図」(ボストン美術館蔵)は釈迦の涅槃入滅に際し天女、仏僧、動物らが痛哭する姿を描く。また軸先は横谷宗珉の作。本作品は二〇一七年より二〇一八年の日本国内の展覧会で、日本で初めて公開された。本作品の裏書から、江戸の材木商である冬木屋上田家の三代目弥平次

の遺命により、正徳三年に雲林院へ寄進されたことが確認できる。

先行研究で「仏涅槃図」については美術史でしばしば取り上げられる。そのうち注目すべきは河野元昭氏が指摘するように「仏涅槃図」の右側に在俗の女性が描かれる点である。在俗の女性とは、一体誰なのであろうか。この在俗の女性を慟哭する婦女とみた場合、筆者がさらに注目したのは女性からみて前方に、供華する童女が描かれる点である。その位置関係も涅槃入滅する釈迦と慟哭する婦女の間に、供華する童女が描かれる点は、重要な意味をもつと予想される。また二者は当然ながら冬木屋本家に関係する人物と目される。筆者は以前、『茶の湯文化学』において、大燈国師墨蹟「凧」(九州国立博物館蔵)の箱墨書に政郷の自署がある点および雲林院への寄進に関して周縁について論じた。すなわち一蝶筆「仏涅槃図」

の存在は、その後の雲林院と冬木屋の関係を考える上で、重要な作品と位置付けられるとともに、一蝶や宗珉といった冬木屋周辺の人々との関係をより明確にできることが期待できる。

ところで冬木屋の研究で重要な位置を占める系図および過去帳の存在が確認でき、一族の人間関係がより明確となった。このことにより発表者は「仏涅槃図」を、正徳三年時点での冬木屋をめぐる人間関係の縮図であると捉えた。発表では特に寄進に際して発願者である政郷の遺命を明確にすることともに、実際の寄進が四代目郡嵩(喜平次)により行われたため、本作品にどのような当時の周縁が反映されているのか論じた。また本発表では冬木屋と一蝶と宗珉との関係、および冬木屋が「仏涅槃図」を雲林院へ寄進する背景について裏書からの検討を行い、「仏涅槃図」の制作背景について冬木屋を基点に考察した。

## 例会のご案内

※例会の日程・会場等、変更する場合がありますので、ホームページまたは事務局までお問い合わせください。個人宛にメール等でのお知らせはしておりません。

### 東京例会

令和五年二月十一日(土)

午後二時～

(Zoom開催予定)

「松平不昧の新しい道具づくりについて―小林如泥の指物作品調査から―」  
倉澤佑佳

「高橋箒庵―『大正名器鑑』を中心に―」  
齋藤康彦

### 近畿例会

令和五年三月四日(土)

午後二時～

(会場)同志社大学 今出川キャンパス  
良心館 RY105)

「信濃飯田・市岡家の茶の湯」

廣田吉崇

「定家筆「泊瀬山」と俊成・西行・

定家筆「三色紙」の表装」

中村 幸

金沢例会

令和五年三月十二日(日)

午後一時三十分～

(会場)金沢 IT ビジネスプラザ

武蔵)

「茶の湯と社会的意義／地域への

影響」

伊東 梢

高知例会

令和五年二月十二日(日)

午前十時～正午

(会場)高知県立文学館 慶雲庵

茶室)

茶の湯関係文献を読み所感の発表

岡倉天心『茶の本』第七章輪読

(各自お持ちの本をご持参下さい)

高知支部二〇二三年度事業計画

## 新刊紹介

『茶書古典集成』(全十七卷)

筒井絏一・熊倉功夫・谷晃・谷

端昭夫監修 淡交社

三卷『宗及茶湯日記』天王寺屋会

記』他會記』山田哲也編集

定価九、九〇〇円(税込)

『山上宗二記』と茶人宗二』

神津朝夫著 宮帯出版社

定価三、八五〇円(税込)

## お知らせ

令和五年度

総会・大会のご案内

令和五年度総会・大会は計画中

です。詳細はホームページ及び令

和五年四月に郵送にてご案内いた

します。

日程:令和五年六月十日(土)・

十一日(日)

場所:東京

テーマ:「江戸の茶の湯(仮)」

令和五年度

大会研究発表者募集

令和五年度の研究発表者を募集

します。発表を希望される方は、

大会研究発表要旨を添えて、学会

事務局までメールもしくは郵送で

ご応募下さい。大会終了後、発表

内容をベースとして論文にまと

め、学会誌『茶の湯文化学』に投

稿していただけるような発表をお

待ちしております。

開催日程:令和五年六月十日(土)、

十一日(日) いずれか

応募資格:茶の湯文化学会会員で

あること

募集締切:令和五年二月十五日

(水)

発表時間:研究発表二十分 質疑

応答十分

・メールにて、件名を「令和五年

度大会研究発表募集」とし、大

会研究発表要旨を添付してお申

し込み下さい。

・応募の際は連絡先のほか、現在

の所属先、肩書等もあれば、併

せてお知らせ下さい。

・応募多数の場合は、審査の上決

定いたします。

・詳しくはホームページをご覧下

さい。

・その他ご質問等ございましたら、

学会事務局までお問い合わせ下

さい。

※事務局の年末年始の休業は、令

和四年十二月二十八日(水)～

令和五年一月四日(水)となり

ます。

※年会費未納の方は、至急払込み

くださいますようよろしくお願い

いたします。